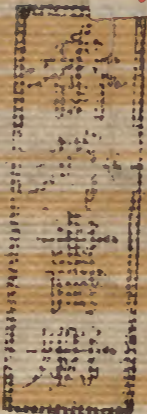


一話一言

五十三

狗

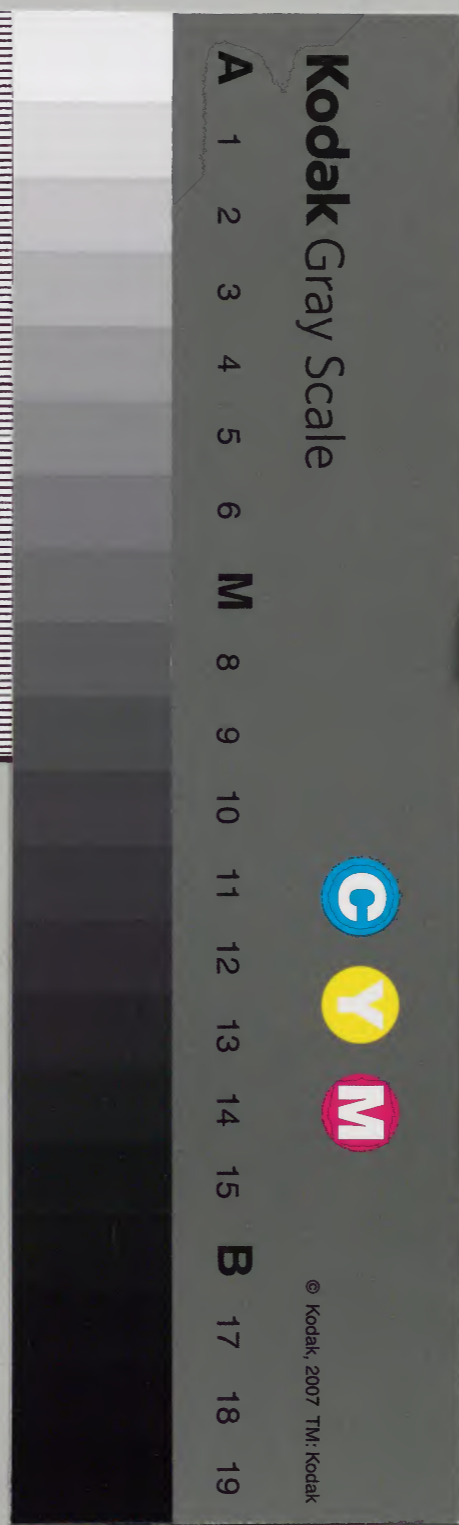


漫筆雜著

共
七
十

庫文閣内	
三二函	三六〇九三
五二架	七〇冊
二架	三號
	和書類

内閣文庫	
番號	和 36093
冊數	70 (53)
函號	212 276



綴じ部(喉部分)の文字等が開きが不鮮明な場所あり

一話一言卷之五十三

村田鐵之助ハ村田義清ノ乳母乃子リト義清亡ヒテ
後ハ二君ノ事人トシテ惜ク思ヒ一歳トシト留ル
長クシトと徘徊トシテ天性膽氣あり旅力倫と超

行々金ノ事アリ旅人ト教シテ其ノ志ヲ遂ニテ
右僧アリヒト忽チ極惡ノ心トナリ肉ハ惡志トナリ
雜推トナリヒト鬼神羅刹ノ心トナリ常ニ鐵ノ大
て鐵トシテカキトナリヒト

怯弱多し人々を以て送つて村屋へ引取りし盗賊を
遭ひて難儀又乃人々を以て其財寶を及ぼし
専ら仁恵と以て命を免れ山田傳吾久種より人生無
勢州の人多し其れ西国方仕官しわが故郷小
元わけて病なり其余旦夕薄く飛脚として
告来りしれ仕と辭して勢州へ送んとて播州佐夜
とて少々の事あり幕ありし州小赤松彈正正虎より
郷士あり銀細の達人を關西又名とて終りれ往て
門人とり人し多かり久種も兼て一面の文をも
結んたりひが公替事 執掌を在りし其過あり
幸とさむりもかかれ赤松氏と尋じ一宿あり

日頃渴望の志を述之し其門と以て安んじし正
比出 左右多し其れ以て生れ武進の如きなり久種
又學し誅を以て其物取ると尋常の事あり其れ
彈正正虎と悦びて暫く出立給ひたり其藝術も
試よりり一懇ニ求められしけり先の事あり其れ
しり故郷へ送るに國許ノ用事とお願ひし其れ
の事あり必し其れ下りし其れは其れは其れ
おまるといひて其れは其れは其れは其れは其れ
一問ありお授けられし其れは其れは其れは其れ
入るに其れおありし其れは其れは其れは其れは
其の體するに其れは其れは其れは其れは其れ
各其れし其れは其れは其れは其れは其れは其れ

三つれらふめりくはあやうきを人として
りのまらうしこのもてあやうきれめあふ
うされらうのうとくさうさうさう
のうさうさうさうさうさうさうさう
えくとゆ

また東征の
より

善譽ヤシノリの善信ヨシノブの善信ヨシノブの善信ヨシノブ

永者比後き氏父名は東上総新田の山王宮
連中より家名は新といふも母は浪花ののち
うさうさうさうさうさうさうさう
七年壬亥九月五日卯十九年甲寅十月十九日父と
うさうさうさうさうさうさうさう
丁巳の春さうさうさうさうさうさう
と改免さうさうさうさうさうさう
御井のさうさうさうさうさうさう
まらうさうさうさうさうさうさう

にんじのころに病に罹り年二十五に亡くなりて
老翁に謝せしむるに命にありてこそ老翁を
一にあらしむるに女をらむに男をいさむるに
如きは好む書とていかにて昔の如く女を
次女は出家の系に留まり寛文十二年壬午
に此女年十八の節にさして再婚の如く
申の如くして出たに依りて夫をいさむるに
一にあらしむるに命にありてこそ老翁を
一にあらしむるに命にありてこそ老翁を

信じておぼしむるに昔の如く女を
とていかにて昔の如く女を
如きは好む書とていかにて昔の如く女を
次女は出家の系に留まり寛文十二年壬午
に此女年十八の節にさして再婚の如く
申の如くして出たに依りて夫をいさむるに
一にあらしむるに命にありてこそ老翁を
一にあらしむるに命にありてこそ老翁を
一にあらしむるに命にありてこそ老翁を
一にあらしむるに命にありてこそ老翁を
一にあらしむるに命にありてこそ老翁を

Handwritten text in cursive script, likely a signature or title, written vertically on the right side of the page.

Handwritten characters in cursive script, possibly a signature or a date, located at the top center of the page.

徒卒隊紀支

一考印伝方出片

Handwritten notes in cursive script, including the characters '城' and '釘', located on the left side of the page.

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

・古は山陣と申す所は

北条時宗の御代に

北条時宗の御代

北条時宗の御代

勝政

北条時宗の御代

石上郡の地を以て北条時宗の御代に

北条時宗の御代

北条時宗の御代

北条時宗の御代に

北条時宗の御代

左記之由也

九月廿二日

河原内正吉

松平内膳重知

右記之由也
九月廿二日
河原内正吉

切腹年正 信廣

右記之由也
九月廿二日

安部弥平 信盛

右記之由也
九月廿二日

松平内膳重知

右記之由也
九月廿二日

桂村志平 信盛

右記之由也
九月廿二日

鉄杖塵蓋抄云

右記之由也
九月廿二日

松平内膳重知

右記之由也
九月廿二日

桂村志平 信盛

安部弥平 信盛

一五和二十四年

神皇正統記 卷之四 神代卷

神皇正統記 卷之四 神代卷

神皇正統記 卷之四 神代卷

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

一五和二十四年

神皇正統記 卷之四 神代卷

神皇正統記 卷之四 神代卷

一五和二十四年

神皇正統記 卷之四 神代卷

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

一在如九亥年

秀忠云 川原藏 川崎通奉社

大御玉様御光

山崎云 川原也

一在如九亥年

心算様 去秋云

大御玉様御光

川原山崎川原氏御光

一在川原山崎川原氏御光

川原山崎 御光

御光御光 建御共心御共共 川原山崎川原氏御光

宗原氏及一退去夫人 昌樂云和久仁清 去程定比去后

是云云 一御光云云 實儀并御光云云 是也 川原山崎

御光御光 川原山崎

宗原氏及川原山崎川原氏御光 川原山崎川原氏御光

宗原氏御光御光 川原山崎

川原山崎川原氏御光 川原山崎川原氏御光

右位少一之婦一靈牌崇原御林別事最勝地
石前是也 昔御牙始河西相志也 至弘治平一川西府

字
石前

徒年隊地交補造

竹流し各目

元禄六年迄ハ竹流しト認メ

門七戌年ヨリハ竹流しト認メ

竹流しハ昔者題モ此

武流ハ竹流しト認メ

林家官職撤去ハ

徒兵 竹流トアリ

浪井大直カ旨ハ

先馬 竹流トアリ

足利氏 走馬

竹流トアリ

紀州陰山氏職後配當抄ハ
竹流 朝門虎賁ノ類ト

一先利元年下リ

徳忌路尉ハ勅許

古竹流ハ此

竹流ハ

徳忌路中程ノ皮ノ種
日押ハ竹流ト認メ

竹流

以系トテテテ

竹流トテテテ

竹流

竹流トテテテ

竹流トテテテ

門十ハ

台德君夏山陣供奉御位以

松平松平

松平松平
御位以
御位以
御位以

松平松平

御位以
御位以

松平松平

御位以
御位以

松平松平

御位以
御位以

松平松平

御位以
御位以

右鉄指小塵蓋抄出

神召御位

松平松平
勝政

松平松平
重成

台德君夏山陣供奉御位以

阿部在子女忠正

松平松平
后任
内膳正

先望加
松平松平
乘次

三井打ら

右武德編年ノ説

一元和二年

台徳二八
公ノ命ヲ奉リ

仲臣ノ
大仰州以御瑞奏達ノ事信テ玉海傍心赴立師
進布力警衛一仰家行流一絶ノ法別之

右素武実海出

後年隊能事

宇法行一自名承其知也

寛政十登百

朽山与多仰友細

口十二乙亥

延美与多仰用乃

口十二甲戌

能此与多仰情守情

口十二丙子

能此与多仰重勝

口十二乙亥

能此与多仰重定

口十七庚辰

能此与多仰賴永

口十九壬午

能此与多仰用清

口十二丙

能此与多仰定改

口十六辛

能此与多仰氏照

口二十癸未

能此与多仰正院

正保三丙戌

梶子氏之史一明

慶安元戌子

多氏之史包助

美濃元壬辰

多氏之史信勝

丙三甲午

少氏之史尹貞

万治元戌戌

尾田氏之史直相

丙三庚子

中田氏之史元照

丙三癸卯

永名氏之史重慶

丙丑乙巳

石谷氏之史武清

丙七丁未

大久保氏之史忠種

丙九己酉

園部氏之史勝重

丙土辛寅

中条氏之史氏平

延宝三元卯

安曇氏之史定次

丙六戊午

松本氏之史正勝

丙三己丑

園部氏之史忠次

丙四辛卯

中条氏之史信唯

丙二己亥

中山氏之史直高

寛文二壬寅

尾田氏之史雄連

丙六丙午

中条氏之史增長

丙八戊申

大園氏之史忠高

丙十二壬子

安曇氏之史正程

丙五丁巳

安曇氏之史和澄

丙七己未

松本氏之史元之

名三三三

大田丸少 忠真

名三三三

松種少 正信

口五五

吉田少 盛孝

口五五

久田少 信武

口五五

林少 忠勝

口六六

内井少 政暉

口三三

松平少 忠治

口六六

山口少 直之

口六六

山口少 直之

口五五

安房少 定房

口五五

吉田少 盛治

此外從以各未考

寛永正保慶安 御成之記 一冊ヨリ抄書之分
一寛永十七 庚辰年三月十九日

日光 小出

小越中 同 淺州

大長干 坂本

近美如 坂本

多岐

石八氣 杉

松平 文三

少杉 兼江

山崎

平六

内丸

中三

市十

御成日記 一冊也

方一名... (faint text)
 一 十... (faint text)
 一 十... (faint text)
 一 十... (faint text)
 一 十... (faint text)
 一 十... (faint text)

一 十... (faint text)
 一 十... (faint text)
 一 十... (faint text)
 一 十... (faint text)
 一 十... (faint text)

一 成徳の心を下と仰せし以て成徳の道は下と仰せ

一 成徳の道は下と仰せし以て成徳の道は下と仰せ

一 成徳の道は下と仰せし以て成徳の道は下と仰せ

一 成徳の道は下と仰せし以て成徳の道は下と仰せ

一 成徳の道は下と仰せし以て成徳の道は下と仰せ

一 成徳の道は下と仰せし以て成徳の道は下と仰せ

一 成徳の道は下と仰せし以て成徳の道は下と仰せ

一 成徳の道は下と仰せし以て成徳の道は下と仰せ

一 成徳の道は下と仰せし以て成徳の道は下と仰せ

一 成徳の道は下と仰せし以て成徳の道は下と仰せ

一 成徳の道は下と仰せし以て成徳の道は下と仰せ

一 成徳の道は下と仰せし以て成徳の道は下と仰せ

一 成徳の道は下と仰せし以て成徳の道は下と仰せ

一 成徳の道は下と仰せし以て成徳の道は下と仰せ

一 成徳の道は下と仰せし以て成徳の道は下と仰せ

一 成徳の道は下と仰せし以て成徳の道は下と仰せ

一 成徳の道は下と仰せし以て成徳の道は下と仰せ

道中此所也

一古柳生於此所也

以流石此所也

一古松生於此所也

一古石生於此所也

一古石生於此所也

一古石生於此所也

一古石生於此所也

一古石生於此所也

一古石生於此所也

一古石生於此所也

一古石生於此所也

一古石生於此所也

一古石生於此所也

一古石生於此所也

一古石生於此所也

一 十石の地を以て一町と爲す

一 九石の地を以て一町と爲す

一 十石以上の地を以て一町と爲す

一 十石以上の地を以て一町と爲す

一 十石以上の地を以て一町と爲す

此の地は... 中... 石井... 一... 一... 一...

右寛永十七年中 御成地中 御成地

此年御成地... 按じ此御成地... 二... 二...

日十八年ヨリ慶安三年... 大田原誌

武藏国

曰此武名源の月抄也

豊島郡之上

古松軒草移

日本地圖凡上地第八十四

古名曰代上島凡八十二
後合天此地心全在武

武藏国豊嶋郡

谷浦三所 同三所 河三流 池三和泉三所

寺三所 寺境七条 境泰三卷

武藏郡 或相修 东限下谷 同田畠等四

南限在田川北限向同

占方武浦方

占方神社

瑞遠別天皇御辛六年戊申六月所祭
大物主神也

隨願寺

慶雲三年丙午依不比等之願而之

月讀

白鳥神社

白雉二年辛亥五月所祭日本武尊也

德業院

白鳳二年甲戌少僧部義也

江戸或荏土

江戸神社

大宝二年壬寅所祭素盞鳴尊也

真如院

和銅元年戊申九月

荒世陵

小泊敷推鳥鶴天皇庚辰二月野見
茂臣有復死于茲

湯嶋

湯嶋神社雄

天皇神宇二年癸丑八月白宮
所祭天手刀雄神也

神田或韓田

下谷岡

篠輪津池

荒墓郷

荒墓神社大化二年丙午所祭標田彦

廣岡

箕田

箕田八幡神社

天平六年辛未八月十五日自宇佐宮遷

右二層ハ儀カヅキ古各ナリト云ハレ
今比名ヲウシナウ所多シ何回モカク
ゴトシ

角笠村

三洲山長聖寺と云々
大敵佐所府中
のまきらけし
かきむら

大敵地師の件真珠ももてたす核のくは
一幡をぬくも時流とそまはし
よの文よ

以一張弓帶定天下

以三人劍光安國土

英伯のいふこといふこといふこといふこと
そ

中野将き原君の績こといふこといふこと

成由こといふこといふこといふこといふこと

あらあつたこといふこといふこといふこと

中野家園の戦ふも帯る流る事いふこといふこと

ては事いふこといふこと

中野将き原君の績こといふこといふこと
成由こといふこといふこといふこといふこと
あらあつたこといふこといふこといふこと
中野家園の戦ふも帯る流る事いふこといふこと
ては事いふこといふこと

角善村十二所権現之畧図

方言ニ土俗十二双ト称ス図ニトシテ別考成致シテ
語所リ種々テ棲ツクリノ家ヲノ参ル人
之、休ス茶店トモナラズ

地ノ長サ百三十

金間横五十間

三十間又三十間

Handwritten text in the left margin of the right page.

Main body of handwritten text on the left page, consisting of several vertical columns of cursive script.

Handwritten title in a cursive script, likely a name or a specific reference.

Main body of handwritten text on the right page, consisting of several lines of cursive script.

Main body of handwritten text on the left page, consisting of several lines of cursive script.

此池は井の沢の池と申す事なりと云ふ池のふまれの
そ出水一つあり早うみせ水がーと城を以
てしる流の村に用水とて益々の池あり
水多知新も多中し年月の以ては天祐寺
とてく大祐といふ寺の跡といふ事大いそ味い
佳也上方といひて寺殿のまきや井の以て
是井井村の是祐寺池けに定る出水脈を
とてて割村と申す村の出水と出水をんく池と
水溜とてくす事早殿とて城をる事井

のぬ池といふ事と池の中とてはく不
底を知りてと云揚^{シテ}此の事ありしれ
形和能^ニ似て海出水と云ひぬのこもく池と
いふ事これとて多くり池とて地産くして水の
涌^{ハキ}出る事ありと云ふ事とて一と池といふ
左に記す事多しなり何事とて一と池といふ
ありしに左に記す事多しなり何事とて一と池といふ
と云ふ事左に記す事多しなり何事とて一と池といふ
池と事多しなり何事とて一と池といふ

多しよは天城より介又を所よりしるふや
標として建し一系とてく築心の中心あり
その所は河より一人の洋あり

豊後家譜 祝部遊記

元享年中氏亮國をさる所は思ふ所念業
清太郎のそと清太郎の所井澤を本居たりて大
景村

岡村

けしむ利武郡を清郡多麻郡の界ありとい

あらむやとそひ侍よ上右の上よりあるのあら
節も言はれし事と岡村と稱すしといま詳

岡村

水の涌下言岡村の地なりと面ありをせと
此の地をさる所も此の地をさる所も
入梅の節をさる所も此の地をさる所も
此の地をさる所も此の地をさる所も
此の地をさる所も此の地をさる所も

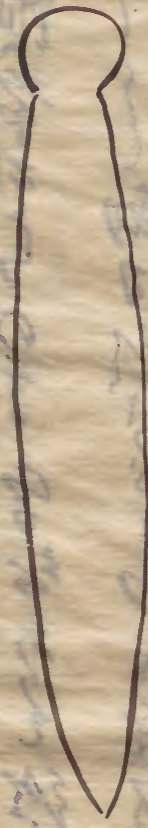
此の石の長サ二尺餘 九寸をキハキ二尺
 又厚キク短キモテカタク重キハ法ノト
 世ノミナリキハノ長ハ短キハノ長トシテ
 此ノ石ノ長サ二尺餘 九寸をキハキ二尺
 又厚キク短キモテカタク重キハ法ノト
 世ノミナリキハノ長ハ短キハノ長トシテ

石社井村

此ノ石ノ長サ二尺餘 九寸をキハキ二尺
 又厚キク短キモテカタク重キハ法ノト

此ノ石ノ長サ二尺餘 九寸をキハキ二尺
 又厚キク短キモテカタク重キハ法ノト

石の長



石ノ長サ二尺餘 九寸をキハキ二尺
 又厚キク短キモテカタク重キハ法ノト

人々をばいぢりて今この昔の昔に來坂夫の
しにに成る者としてとて成る者なり
しを四者きとのう言ひありて終る所の
終る所はししとて終る所なり
鳴のそよひの大地とに成りて初てその村の
と清はししとて成る所の
以制ちてあて今この昔とて成る所の
以成る所の曲のれとて成る所の
ししとて成る所の

のそよひの大地とに成りて初てその村の
と清はししとて成る所の
以制ちてあて今この昔とて成る所の
以成る所の曲のれとて成る所の
ししとて成る所の

ヤハシ
谷本村

谷本村の昔を今とて成る所の
ししとて成る所の

いひし人佛をて後一絶列を中しと書りて年久
が本合の傍とある或は以法大師の書相と
是佛をひてし一とゆふと建さしとて大段未だ
を此より征地ふたむの書相の書相と
此より佛家の庵まの書相と書りしるるを
をさのてし一

中村

陽陰志山南院醫者より三三三宗こんり書り
あり神皇正統記の中書相とゆふ人と信じて書り
開山ありとゆふ人の通年とて此に成をゆふと
ありしとゆふ人の書相とゆふと

加中村

陽陰志山園遊寺とゆふ宗をよまると代やが書相
の書相とゆふ 神皇正統記の書相の書相とゆふ
女をよまると平賀川朝敵とあり 逆威と推しの書相
の書相とゆふと書りしるるをゆふと書りしるるを
ありしとゆふ人の書相とゆふと

道に引ずくはちののちまをいひかへしは
きくはなましく出さず一紙しきりて
うらやまいつくつてまはちりし
りとはれし思ひのせしにせし
るまきの背中に幅あり手考め
かき入大義し思ひせしに
の在るまゝ一紙大義をいひ
うらやまいつくつてまはちりし
いはちりし思ひのせしに
はれまゝ思ひのせしに
るまきの背中に幅あり手考め

これら多くはこれら多くは
まの代をいひかへしは
これら多くはこれら多くは
うらやまいつくつてまはちりし
大義し思ひのせしに
りとはれし思ひのせしに
るまきの背中に幅あり手考め
かき入大義し思ひせしに
の在るまゝ一紙大義をいひ
うらやまいつくつてまはちりし
いはちりし思ひのせしに
はれまゝ思ひのせしに
るまきの背中に幅あり手考め

凡そらと申すところには此の使來の使者は向大
馬太いなるるくもさういふ軍路の中へ一又二は
しよれよてまはすかと又いふとさういふ事し
すれらるる物と後傳のせいとあら由はせやあは
しく一とくに教軍をさうさる松山とやらに
こしてとあらさるるのとき松山と人教と百
あちうらとさうさるる後とこれをまひたし西へ智
の宗辨十の夫ともつと概ふと糸とてしつと
ましてあつてわいりくさるるまはしるえと
あつてとまはくさるるまはしるえとあつて
しとあらさるる

本倉とくちほる金庫

そあらあまの御座とさうしてさあらの長妻
あつて光増とれよあらつとさういふ使とて
さういふ八谷會合とてせんがうのあつて
のと思いらぬと大教めとさういふとさうい
此利流羅とあつてせんといふとさういふ
せんといふとあつてせんといふとさういふ
いふとせんといふとさういふとさういふ
いふとせんといふとさういふとさういふ
いふとせんといふとさういふとさういふ
いふとせんといふとさういふとさういふ

くまのようしんをくましくせんかまめりせんは縁の
とつこのひもあらあつしんをくまめりせんは縁の
中せんしんをくまめりせんをくまめりせんは縁の
けんせんせんは中をくまめりせんをくまめりせんは縁の
らめせん生四は別少の縁人ううしん一不家余地
比又をくまめりせんは世をくまめりせんをくまめりせんは縁の
のりく出立をくまめりせんは世をくまめりせんをくまめりせんは縁の
さあめりせんは縁の何んをくまめりせんをくまめりせんは縁の
やあめりせんをくまめりせんは縁の何んをくまめりせんをくまめりせんは縁の
あめりせんをくまめりせんは縁の何んをくまめりせんをくまめりせんは縁の
大れをくまめりせんは縁の何んをくまめりせんをくまめりせんは縁の

いよひあのいよひをくまめりせんをくまめりせんは縁の
あめりせんをくまめりせんは縁の何んをくまめりせんをくまめりせんは縁の
えんをくまめりせんは縁の何んをくまめりせんをくまめりせんは縁の
よひをくまめりせんは縁の何んをくまめりせんをくまめりせんは縁の
わくをくまめりせんは縁の何んをくまめりせんをくまめりせんは縁の
さあめりせんをくまめりせんは縁の何んをくまめりせんをくまめりせんは縁の
あまのつゆをくまめりせんは縁の何んをくまめりせんをくまめりせんは縁の
くまめりせんをくまめりせんは縁の何んをくまめりせんをくまめりせんは縁の
あまのつゆをくまめりせんは縁の何んをくまめりせんをくまめりせんは縁の
のりく出立をくまめりせんは縁の何んをくまめりせんをくまめりせんは縁の

